



河原 英雄 先生
元日本顎咬合学会会長
大分県開業 歯科河原英雄医院

14:00～

健康長寿を支える臨床医の役割

～患者さんが満足するデンチャーを作って長寿を楽しんでもらう～

「8020運動」が国民の中に広く浸透してきたことは、たいへん喜ばしいことです。しかしながら、私の歯科医院がある大分県佐伯市は高齢化率30%を超え、来院される高齢の患者さんのほとんどが無歯顎ですので、8020運動の話どころではありません。では、歯がなくなったら人生終わりでしょうか。いやいや、自分の歯が20本なくても、義歯やブリッジなどによってしっかり噛める口腔環境をつくり、口腔機能を維持・回復してあげることこそ、超高齢化社会の中でわれわれ歯科医師がやらなければならない仕事です。私は、歯科関係者以外の場所でもたびたび講演などを行っていますが、歯科医療でもっとも大切である「噛む」ことの重要性が、国民だけでなく在宅などで医療・介護サービスを提供する医療・介護関係者にも認識されていないように感じています。自由診療の総義歯のクオリティとまでい

かなくても保険適用内で「噛める義歯」が製作でき、そして全国でそのような歯科医師の先生方が多く育ってくれば、歯科医療の重要性が今まで以上に見直されるのではないかと考えています。ただし、そのような総義歯製作テクニックを私だけで普及させることは非常に困難ですので、総義歯臨床の師匠であるアーニ・G・ローリツェン先生の考え方や技術を少し模倣して簡略化した総義歯製作テクニックを若い歯科医師に伝えていくための勉強会や研修会を開催し続けてきた結果、全国各地に私の考えに賛同してくれる歯科医師が実際に増えてきています。歯科医療の技術は成熟していると言われていますが、私は老婆心ながら「しっかり噛めて口から食べたい」と希望する国民を一人でも多く救ってあげたいと思っています。



和泉 雄一 先生
東京医科歯科大学大学院
歯周病学分野 教授

15:10～

健康寿命延伸のための歯周病管理

わが国は、2007年に「超高齢社会」に突入し世界でも有数の長寿国となっています。一方で、生活習慣病およびこれに起因して認知症や寝たきり等の要介護状態等になる者が増加しています。21世紀の日本をすべての国民が健やかで心豊かに生活できる社会にするためには、生活習慣病等の発病を予防する「一次予防」に重点をおき、「健康寿命」の延伸を図っていくことが極めて重要です。「健康日本21（第二次）」の中で初めて、NCDsという用語が登場しました。主要なNCDsは、心血管疾患、糖尿病、がん、慢性呼吸器疾患の4疾患といわれ、早くからWHOは注目しています。2008年の世界の全死亡の63%にあたる約3,600万人の死亡原因となっており、「21世紀の世界的な発展にとって重大な健康上の課題である。」と考えられているからです。歯科口腔保健の推進に関する法律が施行され、「健康

日本21（第二次）」が実施されることによって、歯科医療は「歯の健康」だけに焦点を合わせるのではなく、健康寿命を延ばすための医療として捉えられるようになりました。口腔の健康と全身の健康との関連性が科学的に解明され、なかでも歯周病は、糖尿病、心血管疾患、呼吸器疾患といった生活習慣病の悪化との関わりについて注目されています。壮年期・中年期には生活習慣病の罹患率が上昇し、高齢期の健康寿命を短くする大きな要因となっています。口腔内でも歯周病の罹患率が高くなり、重症化することによって高齢期での歯の喪失の大きな原因となっています。これからの歯科医療は単なる局所的な治療の提供だけでなく、生活支援や生活の質(QOL)の向上という観点から、その方向性や社会性が求められています。健康寿命延伸のために歯周病を予防・治療し、口腔の健康管理を進めることが重要です。



鈴木 宏樹 先生
福岡県 篠栗病院 歯科医長

『食べる。生きる。活きる。』

～病院歯科からみえること～

「喫食」という言葉があります。あまり聞きなれない言葉かもしれませんが、簡単にいうと楽しんで食事を摂ることです。私達は普段何気なく食事をしているので、それを当たり前と感じているかもしれませんが、好きなものや美味しいものを食べたり、外食や会食したりなど、当たり前に行っている事が出来なくなると人生の楽しみは半減してしまいます。たとえいくつになっても、楽しんで食事ができる「口」を管理することは、我々歯科に与えられた大事な使命の1つではないでしょうか。病院で診る患者さんはそういった喫食や摂食に悩みを抱えている方が多くいらっしゃいます。それは高

齢のためであったり、基礎疾患のせいであったり、様々な理由がありますが、どちらにしても食べる事がどれ程大切かを再認識させられる機会が多くあります。「食べる事」は「生きる事」であり、「活きる事」でもあります。今回は、病院歯科での臨床症例を通して、世界でも他に類を見ない程の高齢化によりいずれ3人に1人が高齢者となる予定である日本においての、しっかりと食べる事が出来る「口」の大事さをもう1度考える機会にできればと思います。



林 美加子 先生
大阪大学大学院歯学研究所
口腔分子感染制御学講座 教授

16:00～

なぜカリエス・フリー達成が健康長寿に貢献できるのか

現代医療は予防の時代と言われはじめて長く経ちますが、なぜ我々は、予防可能な疾病であるはずのう蝕と歯周病で歯を失い続けてきたのでしょうか。真の意味での予防とは、患者個人のリスクに応じたテーラーメイドの計画に基づくべきですが、年代に応じたリスク把握は的確にできているのでしょうか。う蝕の予防を考えた場合、乳児期のう蝕原菌への曝露を可及的に遅らせることが極めて重要であることは周知のとおりですが、成人のう蝕予防の新しい視点として、糖尿病および肥満といった非感染性疾患とのかかわりで糖質制限に重点を置いた取り組みがWHO主導にて世

界規模で始まっています。さらに、全身疾患との関わりでは、近年、特定のう蝕原菌が血管内壁に沈着して脳血管障害あるいは循環器疾患を引き起こすことも証明されてきています。本講演では、従来の口腔疾患としての枠組みを超えて、う蝕と全身疾患との関わりに視座をおいた、う蝕予防のあり方を深く考える機会としたいと思います。



阿部 伸一 先生
東京歯科大学
解剖学講座 教授

14:40～

～全身の健康を維持するために理解したい～

口腔の機能解剖学的役割

口腔と咽頭は、咀嚼・嚥下動作の舞台となるだけでなく、呼吸や発音機能も担う空間です。すなわち鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、気管、食道を別々の空間と捉えるのではなく、「協調的に複雑な機能的役割を担う一つの多目的空間」と理解することが重要なことです。超高齢社会である現在、これらの組織において加齢による機能的な衰えがみられた場合、「摂食」「咀嚼」「呼吸」「発声」の中の一つでなく、すべてに影響が及んでいく状況が報告されるようになってきました。すなわち、それぞれの機能を総合的な視点から理解し、正しく「噛む」「飲み込む」事が全身の健康維持へ様々な効用をもたらす

ことを知っていただきたいと思ひます。さらに、口腔、咽頭から食道、胃、小腸をコントロールする神経系統が密接な関わりを持っていることを解説し、その論拠をお示しいたします。本講演では、はじめに正しく「噛む」「飲み込む」メカニズムについて、多くの動画などを用いてわかりやすく解説します。そして、会場の皆様とその全身の健康へ及ぼす影響について考えていく、活気ある講演にしたいと思っています。



飯島 勝矢 先生
東京大学
高齢社会総合研究機構 教授

16:30～

より早期からの包括的フレイル予防戦略

～新概念「オーラルフレイル」から何を狙うのか～

健康寿命を延伸するためにはフレイル(Frailty:虚弱)及びその根拠をなすサルコペニアという大きな課題がある。8020運動が確実な結果を生んだ後、高齢期における「食力」を改めて再考し、次なるスローガンを掲げ、歯科～歯科の視点だけではなく、社会的側面からも含めた大局的な視点からアプローチすることが求められる。演者が推し進めている大規模縦断追跡コホート調査(柏スタディー)の結果から、特にサルコペニアを軸とするフレイルの解析を行っていくと、早期の要因として歯科口腔分野の軽微な機能低下や食の偏りも認められた。それを改めて「オーラルフレイル」

として新概念を打ち立てた。高齢者の食力を向上させるために口腔分野の総合的機能論への進化が必要であり、さらに歯科-医科-栄養の十分なコラボレーションの下、多面的なフレイルへの一連のアプローチ施策が今まさに急務である。すなわち「栄養(食と歯科口腔)・運動・社会性」という三位一体を大きな目標とし、なかでも「しっかり噛んでしっかり食べる」という原点を今改めて国民運動論にのし上げ、地域に根ざした活動をシステムとして構築する必要がある。本シンポジウムではオーラルフレイルを軸とした最新の取り組みをご紹介します。